読売俳壇

矢島渚男 選

団栗の早くも土を摑みたる　鎌倉市　中江　優子

【評】あっ、こんな所にドングリ、どこから転がって来たんだろう、と思って拾ってみると、なんともう数本の白い根がでていて、自然の生きる力の逞しさを感じている。

秋深む点字楽譜に唄う指　三島市　水口きみ代

【評】点字の楽譜に指が楽しそうに踊っている子。声は出ないけれど、指で唄っているのだ。「秋深む」と淋しそうな季語だが、この子はきっと体一杯に楽しんでいるのだろう。

冬夕焼見る宝くじ買ひしあと　鈴鹿市　岩口　巳年

【評】冬夕焼けを眺める気持ちが分かりますねえ。期待と不安と…今年は当たるかもしれない。

寒月を背に鶏を潰す父　島根県　重親　峡人

玻璃裂くる水晶の夜や冬の雷　さいたま市　関根　道豊

相槌の小槌が仕切り鍛冶祭　東大阪市　梶田　高清

空也の忌ことさら踊躍の力入る　京都市　吉田　基子

不動なるゴイサギの横下り鮎　滋賀県　中沼　克司

おはじきをはじく子の指冬近し　神戸市　倉本　勉

沿線の雪を届けて終着車　相模原市　はやし　央

宇多喜代子 選

家を出て家ふりかへる寒さかな　北本市　萩原　行博

【評】暖かい家から寒い外へ出る。寒さが身体じゅうを襲う。おお、寒いと身を縮める。暖房の部屋が恋しく、いくども振り返る。

でこぼこのおにぎりにして栗ご飯　土浦市　今泉　準一

【評】おにぎりの凸凹の部分が栗。この栗もお茶碗の中ではほどよく納まっていたのだが、おにぎりにすると「でこぼこ」である。

色街の石垣伝ふ蔦紅葉　大阪市　出利葉　孝

【評】神社の石垣、住宅の石垣などであればとくに気にならないのだが、「色街」となると、アレ？と思う。その意外性が自然に句になじんでいる。

たまさかに島にも寄りぬ渡り鳥　壱岐市　目良奈々月

点滴の一語一語を聴く雪夜　川越市　益子さとし

秋うらら埴輪の馬の太き脚　東京都　尾崎　雅子

よたよたと我が身いとうも冬支度　三条市　星野　愛

助手席の犬と見てゐる冬茜　佐野市　村野　則高

小春日やガイドの声の甲高き　武蔵野市　渡辺　一甫

彩どりを大地に綴る草紅葉　和泉市　山崎　文恵

正木ゆう子 選

無線機のスイッチ入れて猟解禁　日南市　宮田　隆雄

【評】打合わせが終わり、犬たちもスタンバイして、いざ山中へ散っていく直前にスイッチを入れるのか。見たことが無くても、上五中七の具体性によって、緊張感が想像できる。

冬の星天に答のあるごとく　足利市　長　芳男

【評】理不尽なことに何故と問うても、答など容易にわかるはずもない。しかし天を仰げば答があるかも。本当に、そうも思いたくなるこの頃。

何を抜け落ちたる捻子か冬座敷　東京都　望月　清彦

【評】類句はあれど、リアルな「抜け落ちた」で戴く。真に或る瞬間に抜け落ちたのだ。何から抜けたのか。捨てるわけにもいかない謎の捻子。

われながら上手にころぶ師走かな　大阪市　大塚　俊雄

寡婦といふ自覚じわじわ花八ッ手　和歌山県　平尾　晴美

かなしくないかなしくないと冬の月　神戸市　吉野　勝子

もふもふとしてまんさくの冬木の芽　東京都　川瀬　佳穂

この一瞬幸せならば冬の蝶　我孫子市　森住　昌弘

一つとて厚さたがはず千枚漬　町田市　枝沢　聖文

真向ひに早池峰の聳つホップ摘み　横浜市　矢沢　寿美

小澤實 選

蓋に泡たっぷりつくや牡丹鍋　袖ケ浦市　浜野まさる

【評】牡丹鍋を煮ている土鍋の蓋をとったら、泡がたくさんついていた。これは猪の肉のあくのようなものに由来するのだろう。この泡にまさに牡丹鍋らしさを感じ取った。

走る狐の前を撃て無心にて　津市　中山　道春

【評】銃による狐猟の心得を一句にしているわけだ。下五「無心にて」は、どんな銃猟においても共通するものかもしれない。

床の間の博多人形狩の宿　志木市　谷村　康志

【評】狩人が利用する宿の床の間には、獣の剝製か銃などが飾られていそうなもの。その予想をくつがえされた。博多人形がちょっと不気味。

猫通るところだけ空け栗を干す　土浦市　小川　智昭

返り花雑賀の一揆ありし浜　泉佐野市　布野　寿

ジェット機の騒がしき空神渡　川越市　横山由紀子

猪の事故死パトカー来てをりぬ　出雲市　石川　寿樹

冬日和選挙カーから大きな手　福島市　大西　稔子

秋祭ハッカパイプを首に提げ　東京都　中島　徒雁

冬に入る濃いめに垂らす入浴剤　海老名市　山田　山人